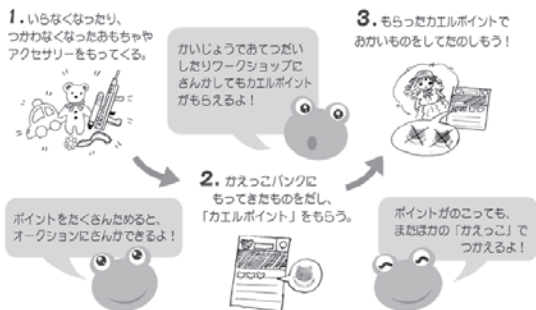


## 《かえっこ》～遊びの中で育まれる、リユースのこころ～

かえっこカエルクラブ／環境カウンセラー 伊藤 真理

How To Kaekko  
《かえっこ》のおそじかた

(図1) 《かえっこ》のロゴマークと遊び方説明 (子ども向け)

## 1 はじめに

おもちゃは「壊れて使えなくなった」というより「使わなくなった」という理由で廃棄されることが多いものかもしれません。でも壊れていないものをごみにしてしまうのは、もったいないし、ましてや一時は子どもが夢中になり大切にしていたものを捨ててしまうこと自体になんだか違和感を覚えます。

《かえっこ》(図1)は、そんな「使わなくなったおもちゃ」を「必要とする誰か」に渡すことができる買い物遊びのシステムです。いまや全国的に広がっている《かえっこ》の活動のおかげでたくさんのおもちゃが廃棄処分の憂き目を免れ、新しい持ち主のもとであらたにおもちゃとしての役割を得ていることはまちがいありません。

## 2 《かえっこ》のはじまり

《かえっこ》は2000年に美術家の藤浩志さんご一家の手で始まりました。当時藤家は「家庭内ゼロエミッション」として「ビニールプラスチック・コレクション」という家庭から排出されるすべてのごみを素材として貯めていく活動をしていたのですが、子どもの遊ばなくなったおもちゃの処分には困っていました。それは、おもちゃが素材も形も大きさもバラバラで分類しにくい上に、まだ使えるので分解するのももったいなかったからです。そんなおもちゃが溜まっていたとき、美術館のアートフリーマーケットへの出店を誘われました。「お店屋さん？やりたい！」という娘たちに「要らないおもちゃと何かを交換するお店」を提案し、

子どもたちの手による姉妹の「かえっこショップ」が実現しました。これが後に発展・成長して「かえっこカード」と「カエルポイント」を使う《かえっこ》システムになったのです。

### 3 《かえっこ》のシステムとしかけ

《かえっこ》システムにはさまざまな仕組みとしかけが用意されています。その主なものをご紹介します。

#### ①かえっこバンク

おもちゃが持ち込まれる場所です。バンクマンを担当する子どもが自分の主観でおもちゃを査定して、「かえっこカード」に「カエルポイント」をスタンプします。おもちゃの査定額は原則的に1~3カエルポイント、その基準は「まあまあのおもちゃ：1ポイント、そこそこ：2ポイント、なかなか：3ポイント」です。

#### ②値札シール／運搬

値札つけ担当の子どもが値札シールを貼り、運搬担当の子どもが「かえっこショップ」に運んで並べます。値札は、1ポイントなら赤、2ポイントは黄、3ポイントは青のシールです。入荷価格とは関係なく自分の主観で貼ります。

#### ③かえっこショップ

お客さんの子どもがカエルポイントで買い物をする場所です。レジ担当の子どもがポイント数を確認し、その分のスタンプをペンで消します。ショップは、開催場所や会場の大きさ、子どもたちに何をさせたいかによってさまざまに設定できます。

#### ④ワークショップコーナー

会場にはカエルポイントをもらうことができる、体験や遊びのワークショップコーナーを設けます。ワークショップはイベントの趣旨に合わせて用意することもあれば、子どもたちがその場で考えることもあります。基本的には1~3ポイント程度の「カエルポイント引換券」をもらえます。

#### ⑤子どもスタッフ

バンクや値付け、運搬やショップなどでスタッフとして働くことでカエルポイントをもらうことができます。会場では子どもスタッフを募集します。

#### ⑥かえっこオークション

「感動的なすごくいいおもちゃ」は特別に大量のカエルポイントで買い取られ、「かえっこオークション」に出品されます。イベントの終了30分前に行われるオークションに参加したい子どもは、ワークショップ体験やスタッフで働き、カエルポイントをもらう努力をします。

およそ以上のようなシステムで《かえっこ》は運営されます。《かえっこ》の「かえっこカード」と「カエルポイント」(図2)は、「世界共通のこども通貨」が謳い文句で、どの会場でいつ発行されたカード・ポイントであっても、どこの会場でも、いつでも使うことができます。「世界共通」と言われるゆえんは、藤さんが海外にも《かえっこ》を持ち出し、作品として展示・開催しているからですが、「世界共通」という広がり子どもたちに夢を描か



(図2) かえっこカードとカエルポイント

せることにつながるだろうという、いかにも美術家らしい発想から生まれたものであることも確かです。

#### 4 《かえっこ》開催の魅力

美術館やアート系イベントを拠点に始まった《かえっこ》が日本各地に飛び火し、今では数千カ所の場所と地域で、さまざまな団体がさまざまなコンセプトで《かえっこ》を開催しています。おもちゃをリユースする仕組みを兼ね備えたイベントで、このような広がりをもつものとはとてもめずらしいのではないのでしょうか。

ここで《かえっこ》を環境啓発活動として開催している施設や団体を紹介し、おもちゃのリユース活動に止まらない《かえっこ》の魅力に迫りたいと思います。

##### ①京都市みやこ／京エコロジーセンター

2011年6月の環境月間のイベント“エコセンカエルフェスタ”で初めて《かえっこ》を実施し、その後セ

ンターで開催される他のイベントでもカエルポイントがもらえるようにして《かえっこ》の実施を続けています。《かえっこ》は「環境について考えるきっかけになる」「環境ボランティアの新たな活躍の場の創出になる」「展示室やミニイベントと連携できる」という理由から実施していますが、《かえっこ》を実施することが地域や他団体との連携にもつながるため、センター事業の拡がりも期待しています。

##### ②兵庫県川西市／環境啓発施設「ゆめほたる」

「ゆめほたる」では、《かえっこ》のほかにもキッズ「り・ほ・ん」という市主催のイベントが毎年開催されています。キッズ「り・ほ・ん」は、「子どもが主役」「おもちゃのゆずり合いにポイントを使う」という点では《かえっこ》と似ていますが、対面販売のフリーマーケットの性格が強く、運用時間と参加人員の制御

などが容易です。一方、《かえっこ》は、単純なルールなので自由度が高く、主催者や参加する子どもたちの創意工夫でカスタマイズできる発展型プログラム特有の面白さがあると感じているそうです。「ゆめほたる」では今後、出前を含む定期開催と常設型の「かえるステーション」を計画しています。

### ③金沢市／金沢エコライフくらぶ

金沢エコライフくらぶは、「金沢21世紀美術館」のオープンに向けたイベントで《かえっこ》に出会い、予想以上に可塑性のある魅力にすっかりはまって、美術館オープンまでの1年半ほどの間に14回もの《かえっこ》を開催されました。その1年後くらいに久しぶりに地域の福祉まつりで《かえっこ》を開催したところ、「かえっこカード」を大福帳のように紐で綴って持ってきた子どもがいて、やりはじめたからには、年に1回は開催しないと、あっという間に《かえっこ》を楽しむ時期を卒業してしまい、中学・高校生スタッフとして参画する楽しさにも進めないことなど、地域でやり続けなくてはいけないという社会的責任を痛感されたそうです。「金沢エコライフくらぶ」は、以後さまざまな形で《かえっこ》を開催し、《かえっこ》開催に必要な備品類を、近隣の児童館や環境啓発施設にも貸し出しています。

## 5 おわりに

《かえっこ》は、どこで、誰が開催するかで、コンセプトが変化することが重要だと藤浩志さんは考えています。そんなことから《かえっこ》は、環境啓発のイベントでの開催だけではなく、学校で教育プログラムとして開催することもあれば、商店街活性化の目的で空き店舗やアーケードなどで行うこともあります。また、目的に応じたワークショップを付加させられる仕組みを活用して、子どもに災害からの自衛手段を身につけさせる防災ワークショップ「イザ！カエルキャラバン！」を行うNPO<sup>1)</sup>もあれば、常設的に《かえっこ》を行うアートセンター<sup>2)</sup>の「かえるステーション」や子どもたちと森をつなげる環境ワークショップ「かえるの森へ！」<sup>3)</sup>なども現在進行形で動きはじめています。

《かえっこ》がさまざまな人の手で開催されるようになって10年以上の時が経ち、そろそろ子どもの頃《かえっこ》で遊んだ経験をもつ“おとな”が出現していてもおかしくない時期になりました。《かえっこ》で遊んだ経験を持つ子どもが社会に出て、あらゆる分野で活躍していく姿を想像するのは、各地で《かえっこ》開催を続けている人たちにとって、うれしい夢であり、大きな励みにもなっていることでしょう。

(廃棄物資源循環学会誌Vol.23, No.3, PP.206-215 (2012) に関連記事掲載)

### 参考文献

- 1) NPO 法人プラス・アーツ <http://www.plus-arts.net/>
- 2) 3331 ArtsChiyoda <http://www.3331.jp/>
- 3) 「かえるの森へ！」をかながえる会 <http://www.frogforest.net/>